



渡具知

TOGUCHI



プロフィール

渡具知は、比謝川河口の北岸台地上にあり、西は東シナ海に面している古い集落です。比謝川河口が天然の良港として昔から文物の交流地として栄えた一方、薩摩侵略と沖繩戦時の米軍上陸拠点にもなりました。慶長一四年（一六〇九）の島津氏琉球侵攻の記録「喜安日記」には、三月二五日酉刻喜安らが船で「大湾渡口」に着いたことが記されています。『絵図郷村帳』（一六四六年）・『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）に「戸口村」と見えます。『琉球国由来記』（一七一三年）には「渡口」「渡具知」、『中山伝信録』（一七二二年）や『琉球国旧記』（一七三二年）では「渡具知」とあります。『球陽』には、尚育王五年（一八三九）渡具知湊に菩薩像が流れ着き、拾い上げられた同像は上天后宮（現那覇市）に納められたとの記述があります。

比謝川河口断崖上には胎蔵界大日如来の真言アピラウンケンを刻んだ梵字碑があり、一六世紀前半の日秀の関係者による建立ではないかと言われています。比謝川河口北の当地側にトゥマイグスクあるいはクマイグスクとよばれる奇岩があり、北山の仲宗根按司が難を逃れ身を隠したとの伝説を残しています。一八九七年に鹿児島・沖縄・

FURUGEN



新たなコミュニティの形成

古堅地区は沖繩戦中には米軍の野戦病院が置かれ、戦後は米軍用地モーガンマナー地域となつて長く嘉手納航空隊の家族住宅用地（嘉手納住宅地区）として接収されました。同地区は復帰後の一九七七年に返還され、土地区画整理事業が実施され、生活基盤の

古堅は、南方崖下を比謝川が流れ、対岸は嘉手納町に接する古層の村です。『おもろさうし』巻一五の六七・六八などに「ふるけものろのふし」というふし名があります。これは「古堅ノロ」のことだと考えられています。内容は古堅ノロとは無関係です。村の伝承によると古堅の創始は仲今歸仁按司系統であると伝えられています。『絵図郷村帳』（一六四六年）・『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）には「ふるけむ村」と見え、『琉球国旧記』（一七三二年）に古堅邑とあります。ただ『琉球国由来記』（一七一三年）には古堅の拝所名は見えませんが、現在、神アシャギ・古堅御嶽があり、大湾ノロが祭祀を行つたと伝えられています。また、廃藩置県後に移住してきた土族層でつくる屋取として皆呉集落がありました。



古堅

プロフィール

台湾を結んだ海底電信線の陸揚地があり、軍事的にも重要な施設でした。



古堅公民館

整った住宅地域となり、八二年から居住が始まりました。また、大木・水釜線・比謝川大橋が整備され、嘉手納町市街地と直結し、南の玄関口となつて現在住宅立地が進行中です。待望の古堅公民館が一九九九年に完成し、新たな拠点として地域コミュニティづくりが行われています。



生年合同祝賀会



舞踊



舞踊「浜千鳥」韓国済州道公演

米軍の上陸地点

一九四五年の沖繩攻略作戦では米軍の上陸地点のひとつとなり、渡具知前又浜は米軍によりイェロービーチと名付けられ、上陸用舟艇などにより物資の陸揚げが行われました。沖繩戦後は米軍用地として接収され、五〇年に旧集落に移住しましたが、五四年六月に再接収され、比謝西原への集団移住を余儀なくされました。復帰後軍用地の返還にともない、土地改良事業や復帰先地公共施設整備事業が実施され、徐々に復帰居住が進んでいます。スイカ、メロン、花卉など早くから集約型の農業が発達。一九九五年に、豊かなむらづくり部門で農林水産大臣賞を受賞しています。現在、「読谷道路」整備事業が進められ、渡具知の姿は大きく変わろうとしています。

比謝川・泊城・西浜の水辺ラインは渡具知を代表する自然資源です。泊城から比謝川沿いは比謝川沿岸整備計画の一環として、泊城公園が整備され、多くの家族連れが訪れています。



ゆいまーる民謡ショー